

青年期の親子関係と感情の制御，表出能力 —父親と母親に対する性別の違いの分析—

新谷里菜 信州大学教育学部
水口 崇 信州大学学術研究院教育学系

概要

社会の制度や在り方は、家族関係も変容させる。それは親子関係においても例外ではない。特に父親と母親の子育て、子どもとの接し方や関係は、少子化等の影響もあり従来とは異なる様相を呈しつつある。そこで本研究では、両親との関係が感情の制御と表出に及ぼす影響について分析した。青年期の後半に相当する19歳から24歳の108名を対象に調査を実施した。ノンバーバルスキル尺度、母親及び父親への親密性尺度、親子間の信頼感に関する尺度を使用して、質問紙調査を実施した。得られたデータを男性と女性に区分した上で、父親や母親に対して評定した値を分析した。その結果、男性は感情を制御する能力と母親に対する信頼感に負の関連が検出された。これは母親に対する強い信頼が、自発的な表現を開放し感情の制御を緩和させるためと考えられた。一方、女性は感情を制御する能力と父親に対する信頼感に正の関連が検出された。父親に対する信頼を高めることによって、精神的な自立が強くなり、自分の感情の制御が高まる可能性が推測された。このような性差を生起させた理由について論議した。

キーワード：親子関係，ノンバーバルスキル，親密性，信頼感，性差

問題と目的

近年、社会情勢の変化に伴い、父親と子ども、母親と子どもの関係が大きく変わりつつある。乳幼児に対する肯定的な関心には性差がないとされている（花沢・松浦，1986）但し、父親と母親の子どもとの関わり方には違いがあり、父親はより遊びの中で抱くことが多く、母親は世話やしつけの中で抱くことが多い（Lam, Plech, Charnov & Levine, 1987）。また遊びの内容でも、父親は身体的でダイナミックな遊びが多く、母親は伝統的な遊びや読書が多いとされてきた。しかしながら現在、女性の社会進出がますます増加し、母親と子どもの在り方も着実に変化しつつある。女性の社会進出によって、晩婚化が進んだこともあって、母親と子ども、特に娘との関係は、今までよりも密接になっている。これには少子化によって、家庭に希少な子どもに対してあらゆる期待と注目が注がれていることも

関係するだろう。その仲の良さ、距離の近さについては「一卵性母娘」と称されることさえある。藤田・岡本（2009）によると、そのような関係において、母親と娘が、情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく、親密にすることで支えの関係を築きやすいとされている。ところが、距離の近さによって共依存的な関係となり、娘の精神的健康に悪い影響が及ぼされることもある。加えて、女性の社会進出は男性に対する育児への参加を加速させた。育児に参加する男性は「イクメン」と称され、現代社会において好意的に捉えられている。このことも少なからず、子どもと父親の関係に変化をもたらしている。

形態が変化しても、初めて出会う大人は父や母であることは変わらない。その中で、様々な感情や言葉のやり取りを行い、特別なつながりである「愛着」を構築していく。Bowlby（1969 / 1976）は、「ある個体が他の特定の個体に対して、接近を維持しようとするような愛情の絆」と定義し、その具体を愛着行動と呼んだ。愛着行動には「発信行動（泣き・微笑・発声）」、「定位行動（注視・後追い・接近）」、「能動的な身体接触行動（よじ登り・抱き着き・しがみつき）」などがある。成長して、母や父以外の友人や恋人との関わりが強くなっても、初期の父親や母親との関りは、特別な意味合いを持つ。

Bowlby の主張によれば、愛着はその後、内的作業モデルと呼ばれる表象システムになる。これは、ある状況において、現実に行動を起こす前に、自分の置かれた状況や潜在的に起こしうる行動について、自分自身の中に内在化された表象を基に、一時的に構成するシステムである（Bowlby, 1973 / 1977）。確信や期待を基に、基本的な対人関係を作り出し、これをモデルとして活用して、対人関係のパターンとして活用していく。Bowlby の理論によれば、愛着は子どもの時だけではなく、青年期や成人期の対人関係に影響を与えることになる。また、愛着スタイルは感情の表出や制御にも影響を与えると考えられている。安定型の愛着スタイルを持つ場合、感情の表出性や感受性と正の関連を持ち、アンビバレント型の愛着スタイルを持つ場合、それらと負の関連を持つ。また、愛着次元での分析では、「関係不安」は感情の感受性に、「親密性回避」は表出性にネガティブな影響を与えていた。さらに、感情の制御については、関係不安と親密性回避の相互作用が見られ、特に「関係不安」が低い場合には「親密性回避」影響が認められるという研究結果も報告されている（金政, 2005）。

しかしながら現在、愛着理論と概念は拡大解釈される傾向にある（e.g. 米澤, 2015）。よってここでは、愛着（アタッチメント）という概念を直接使用しない。そこに内包される親密と信頼だけを取り扱うことにする。本研究では、母親及び父親との特別な絆を構成する親密性と信頼性が感情の制御と表出にどのような影響を及ぼすのか検証することを第一の目的とした。また、性別による親密性や信頼性への影響も検討する。性別とは本来、男女といった生物学的な違いのことを指す。但しそこには、社会が男性、或いは女性に対して期待する行動様式の影響が関与してくる。この影響は時代や社会、文化によって様々である。そこで性別による差異を分析することを第二の目的とした。

方 法

調査対象者

甲信越地方にある国立大学の学生のうち、教育系の講義を受講する学生 108 名（男性 52 名、女性 55 名、不明 1 名）を対象にした。年齢は 19～24 歳で、平均年齢は 20 歳であった。有効回答数は 108 名であった。

調査内容

フェイスシート項目と、3 つの尺度を用いた質問紙を使用した。尺度項目は、1. まったくあてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. 非常にあてはまるから一つに○をつけてもらう 5 件法で回答を求めた。

フェイスシート項目 性別と年齢を尋ねた。性別は男女どちらかを選択してもらい、年齢はそれぞれ記述してもらった。

ノンバーバルスキル尺度 ノンバーバルスキル尺度（和田，1992）を使用した。この尺度は「ノンバーバル非表出と制御」、「ノンバーバル感受性」の 2 つの下位尺度からなる。今回は残余項目も含めた 24 項目を使用した。

母親への親密性尺度及び父親への親密性尺度 母親への親密性尺度（水本，2016）を使用した。もともとは母親との関係のみ尋ねるものであったため、項目の「母親」の部分「父親」にも読み替えたものも合わせて使用した。「母親（父親）への心づかい」、「母親（父親）への絶対的安心感」、「母親（父親）への価値観の捉われ」の 3 つの下位尺度からなる 19 項目を父母それぞれ使用した。

親子間の信頼感に関する尺度 親子間の信頼感に関する尺度（酒井，2005）を使用した。下位尺度はなく、8 項目を父母それぞれに使用した。

手続き

2019 年 10 月に無記名・個別記入式の質問紙調査を実施した。配布は授業終了後に質問紙の説明と共に行い、退出する際に提出してもらった。提出をもって参加の同意とした。

倫理的配慮

それぞれの親との関係を尋ねる項目もあり、慎重に調査を進める必要があるため、以下の配慮を行った。具体的には (1) 質問に家族との関係を尋ねる項目があることを配布の前に口頭で伝える、質問紙にもその旨を記載する、(2) 回答を避けたい質問項目がある場合は、回答を控えても構わないことを伝える、(3) 回答をやめたくなくなったり、回答に参加しなくなったりする場合には強制はせず、中断しても構わないことを伝える、である。

結 果

ノンバーバルスキル尺度の検討

ノンバーバルスキル尺度の平均値と標準偏差を確認して不良項目をチェックした。ノンバーバルスキル尺度の残余項目を含めた 24 項目に対して因子分析（最尤法、プロマック

ス回転)を行った。しかし、残余項目が因子数を問わず、因子負荷量が低くなってしまい、不適切な結果となってしまった。そのため、残余項目を削除し、因子負荷量が.35を超えることを基準に2因子12項目を採用した(表1)。その後、尺度の命名を行った。第一因子は「わたしと同じくらい敏感に人の行動を理解できる人は誰もいない」など行動の理解、判断・理解力を測る項目が含まれていたため、「ノンバーバルスキル感受性」と命名とした。第二因子は、「わたしはめったに自分の情動や感情を表さない」など、自分の情動や感情を隠したり、維持したりする項目が含まれていたため、「ノンバーバルスキル制御」と命名した。それぞれの尺度の項目内容は表2に示した。

表1 ノンバーバルスキル尺度因子分析結果(最尤法, プロマックス回転)

項目内容	I	II	共通性
17	<u>.73</u>	-.04	.51
14	<u>.64</u>	-.08	.38
4	<u>.50</u>	.10	.30
11	<u>.46</u>	-.13	.19
2	<u>.45</u>	.02	.21
20	<u>.43</u>	.14	.25
8	<u>.43</u>	-.05	.17
12	<u>.37</u>	.36	.36
10	-.25	<u>.89</u>	.70
19	.10	<u>.60</u>	.41
15	.30	<u>.40</u>	.33
6	-.04	<u>.39</u>	.14

因子負荷量が.40以上のものに下線を引いた

母親への親密性及び父親への親密性尺度の検討

不良項目のチェックの後、因子分析を行った。母親への親密性尺度、父親への親密性尺度にそれぞれ因子分析を最尤法、プロマックス回転で行った。もともとの尺度は3因子であったため、それに従ったところ、母親、父親共にどの因子に対しても低い因子負荷量を示す項目があったため不適切と判断した。そこで、2因子で再度分析を行ったところ、すべての項目で因子負荷量が.40以上となったため、2因子を採用した(表3, 4)。ここで、母親への親密性の中の「母親には、私のことは何でも知っていてほしい」という項目は因子負荷量が.40に満たなかったため、項目から削除した。同じく、「父親には、私のことは

表2 尺度の項目内容

項目内容
I ノンバーバルスキル感受性 ($\alpha = .633$)
10. 他人同士の会話のやり取りを見て、その人たちの性格を、いつも間違えることなく話すことができる
19. 私は初めて会ったときに、その人の性格特徴を正しく判断することができる
15. しばしば人から、何事にも敏感で理解力のある人だといわれる
6. 私と同じくらい敏感に人の行動を理解できる人は誰もいない
II ノンバーバルスキル統制 ($\alpha = .745$)
17. 私は誰に対してでも私の本当の気持ちを隠すことができる
14. 私がいつ悲しんでいるのかあるいは落ち込んでいるのかを人を知るのは難しい
4. いつ私が困惑しているのかを、いつも表情から読み取られてしまう
11. たとえ、隠そうとしていても、いつも私の本当の気持ちを人に読まれてしまう
2. 私は、幸せなふりも、悲しいふりも、簡単にすることができる
20. 私は、たとえ取り乱していても、穏やかな外貌を維持するのが非常にうまい
8. 私はめったに自分の感情や情動を表さない
12. 人が私に本当の気持ちを隠すことはほとんど不可能である

何でも知っていてほしい」という項目は、因子負荷量が.40以上を示していたが、父親、母親で項目数をそろえたほうが妥当であると判断したため、今回はこちらも削除した。続いて尺度の命名を行った。第一因子は、自分と親が一人の人間としてのつながりを示す項目が多かったため、「つながりの親密性」と命名した。第二因子は、子どもから親への一方的な感情で、親の価値観や考え方に依存した子どもの在り方を示す項目が含まれていたため、「依存的親密性」と命名した。各因子の項目内容は表5,6に示した。各因子の信頼性を求めたところ、クロンバックの α 係数は、「母親へのつながりの親密性」因子が.90、「母親への依存的親密性」因子が.92、「父親へのつながりの親密性」因子が.93、「父親への依存的親密性」因子が.86であり、尺度の信頼性が確認された。

表3 母親への親密性尺度因子分析（最尤法，プロマックス回転）

項目	I	II	共通性
36	<u>.81</u>	-.18	.58
28	<u>.79</u>	-.15	.55
34	<u>.71</u>	-.09	.46
25	<u>.68</u>	.06	.51
42	<u>.63</u>	.14	.49
35	<u>.62</u>	-.18	.33
39	<u>.61</u>	.10	.44
27	<u>.60</u>	.14	.45
32	<u>.59</u>	.12	.42
33	<u>.59</u>	.06	.38
38	<u>.58</u>	.03	.35
41	<u>.55</u>	-.09	.27
43	<u>.52</u>	.21	.40
31	-.16	<u>.91</u>	.74
30	-.15	<u>.85</u>	.64
29	-.03	<u>.77</u>	.57
37	.16	<u>.73</u>	.65
40	.05	<u>.69</u>	.51
26	.39	<u>.39</u>	.43

因子負荷量が.40のものに下線をひいた

表4 父親への親密性尺度因子分析（最尤法，プロマックス回転）

項目	I	II	共通性
55	<u>.83</u>	-.05	.65
53	<u>.82</u>	-.02	.65
44	<u>.82</u>	-.06	.62
58	<u>.81</u>	-.03	.63
60	<u>.79</u>	-.07	.57
47	<u>.77</u>	.08	.66
57	<u>.73</u>	-.02	.53
54	<u>.72</u>	.00	.52
51	<u>.63</u>	-.05	.37
52	<u>.60</u>	.03	.38
62	<u>.59</u>	.14	.46
46	<u>.59</u>	.06	.39
61	<u>.48</u>	.26	.43
45	<u>.41</u>	.22	.30
50	-.12	<u>.88</u>	.68
49	-.10	<u>.81</u>	.59
48	.09	<u>.75</u>	.63
56	.10	<u>.63</u>	.47
59	.08	<u>.63</u>	.46

因子負荷量が.40のものに下線をひいた

表5 母親への親密性項目内容

項目内容
I. つながりの親密性($\alpha = .90$)
36. 母親にこれまで受けた恩を返すよう意識して行動している
28. 母親をいたわっている
34. 母親の気持ちを察して、適切な対応ができる
25. 母親の気持ちをよく理解しようとしている
42. 私と母親は、どちらかというお互いの距離が近い親子だ
35. 自分に余裕がないときでも母親を気遣うことができる
39. 母親が楽しい生活を送れるように気を配っている
27. 母親が困っていたら、自分のしたいことを犠牲にしても助けになろうと思う
32. 母親には本音が言える
33. 母親に助けてほしいときには、素直に助けを求めることができる
38. 母親の立場を考えて母親に接することができる
41. 母親自身の人生を大事にしている
43. 母親といるとき、私は自分らしくいられる
II. 依存的親密性($\alpha = .92$)
31. 私の意見に母親が賛成してくれないと、不安になる
30. 母親からどう評価されるか気になる
29. 母親のアドバイスに従わないと、後ろめたい気がする
37. 何かを判断するとき、「母親はどう思うか」が気になる
40. 母親に相談せずには、自分で決心できないことが多い

母親及び父親への信頼に関する尺度の検討

同じく不良項目のチェックの後，因子分析を行った。母親への信頼性，父親への信頼性尺度それぞれに最尤法，プロマックス回転で因子分析を行った。元々の尺度が1因子であったため，それに従って分析を行ったところ，母親，父親共に因子負荷量がどの項目でも.40を超えていた(表7,8)。そこで，今回は1因子が妥当であると判断し，1因子を採用した。各項目の内容は以下(表9,10)の通りである。信頼性を求めたところ，クロンバック

表6 父親への親密性項目内容

項目内容
I. つながりの親密性($\alpha = .93$)
55. 父親にこれまで受けた恩を返すよう意識して行動している
53. 父親の気持ちを察して、適切な対応ができる
44. 父親の気持ちをよく理解しようとしている
58. 父親が楽しい生活を送れるように気を配っている
60. 父親自身の人生を大事にしている
47. 父親をいたわっている
57. 父親の立場を考えて父親に接することができる
54. 自分に余裕がないときでも父親を気遣うことができる
51. 父親には本音が言える
52. 父親に助けてほしいときには、素直に助けを求めることができる
62. 父親といるとき、私は自分らしくいられる
46. 父親が困っていたら、自分のしたいことを犠牲にしても助けになろうと思う
61. 私と父親は、どちらかというお互いの距離が近い親子だ
II. 依存的親密性($\alpha = .86$)
50. 私の意見に父親が賛成してくれないと、不安になる
49. 父親からどう評価されるか気になる
48. 父親のアドバイスに従わないと、後ろめたい気がする
56. 何かを判断するとき、「父親はどう思うか」が気になる
59. 父親に相談せずには、自分で決心できないことが多い

の α 係数は、「母親への信頼感」因子が.94, 「父親への信頼感」因子が.94であり、尺度の信頼性が確認された。

表7 母親への信頼に関する尺度因子分析（最尤法，プロマックス回転）

項目	I	共通性
68	<u>.93</u>	.87
65	<u>.91</u>	.82
67	<u>.88</u>	.77
64	<u>.87</u>	.76
69	<u>.87</u>	.75
63	<u>.78</u>	.61
70	<u>.78</u>	.61
66	<u>.55</u>	.30

表8 父親への信頼に関する尺度因子分析（最尤法，プロマックス回転）

項目	I	共通性
76	<u>.96</u>	.91
77	<u>.95</u>	.89
75	<u>.90</u>	.80
73	<u>.81</u>	.66
71	<u>.78</u>	.61
72	<u>.74</u>	.55
78	<u>.71</u>	.51
74	<u>.57</u>	.33

表9 母親への信頼に関する尺度項目内容

項目内容
I 母親への信頼に関する因子($\alpha = .94$)
68. あなたは母親と一緒にいて幸せですか
65. あなたと一緒にいて、母親は幸せだと思いますか
67. 母親をとっても信頼できますか
64. 母親はあなたを信頼していると思いますか
69. あなたは母親が好きですか
63. あなたと一緒にいて、母親は幸せだと思いますか
70. あなたは、母親になんでも話せますか
66. 母親は、あなたになんでも話してくれますか

表 10 父親への信頼に関する尺度項目内容

項目内容
I 父親への信頼に関する因子($\alpha = .94$)
76. あなたは父親と一緒にいて幸せですか
77. あなたは父親が好きですか
75. 父親をとっても信頼できますか
73. あなたと一緒にいて、父親は幸せだと思いますか
71. 父親はあなたのことが好きだと思いますか
72. 父親はあなたを信頼していると思いますか
78. あなたは父親になんでも話せますか
74. 父親はあなたになんでも話してくれますか

母親及び父親への親密性尺度の性差の検討

母親への「つながりの親密性」における性差 今回は因子分析で得られた母と父それぞれ 2 因子において性差の検討を行った。母親へのつながりの親密性における男女それぞれのデータ数、平均値、標準偏差を表 11 にまとめた。母親へのつながりの親密性において、女性の方がやや平均点が高い結果となった。対応のない t 検定を行った結果、有意ではなかった（両側検定: $t(105) = -1.04, p = .299, d = -0.20$ ）。したがって、母親へのつながりの親密性に性差はないといえる。

表 11 母親へのつながりの親密性 性別ごとの統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	3.5	3.65
標準偏差	0.8	0.7

母親への「依存的親密性」における性差の検討 母親への依存的親密性の男女それぞれのデータ数、平均値、標準偏差を以下の表 12 に示す。母親へのつながりの親密性において、女性の方が高かった。有意差の検証のため、対応のない t 検定を行った結果、有意であった（両側検定: $t(105) = -5.17, p = .000, d = -0.99$ ）。したがって、母親へのつながりの親密性は性差があるといえる。

表 12 母親への依存的親密性 性別ごとの統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	2.22	3.17
標準偏差	1.01	0.89

父親への「つながりの親密性」における性差の検討 父親へのつながりの親密性の男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表 13 に示す。対応のない t 検定を行った結果，有意ではなかった（両側検定： $t(105) = 0.22, p = .823, d = 0.04$ ）。つまり，父親へのつながりの親密性において性差はないといえる。

表 13 父親へのつながりの親密性 性別ごとの統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	3.35	3.31
標準偏差	0.92	0.12

父親への「依存的親密性」における性差の検討 父親へのつながりの親密性の男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表 14 に示す。父親への依存的親密性を検討するため，対応のない t 検定を行った。結果は有意ではなかった（両側検定： $t(105) = -1.12, p = .270, d = -0.21$ ）。つまり，父親への依存的親密性において，性差はないといえる。

表 14 父親への依存的親密性 男女ごと統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	2.45	2.66
標準偏差	1.12	0.89

母親及び父親への信頼に関する尺度の性差の検討

母親への信頼性の性差 母親への信頼に関する尺度の男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表 15 に示す。母親への信頼性について対応のない t 検定を行った結果，有意ではなかった（両側検定： $t(105) = -1.80, p = .074, d = -0.35$ ）。つまり，母親への信頼性において性差はないといえる。

表 15 母親への信頼性 男女ごと統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	3.98	4.28
標準偏差	0.87	0.82

父親への信頼性における性差の検討 父親への信頼性に関する尺度の男女それぞれのデータ数、平均値、標準偏差を以下の表 16 に示す。父親への信頼性について対応のない t 検定を行った結果、有意ではなかった（両側検定： $t(105) = -0.63, p = .529, d = -0.12$ ）。つまり、父親への信頼性において、性差はないといえる。

表 16 父親への信頼性 男女ごと統計量

	男	女
データ数	52	55
平均値	3.9	4.02
標準偏差	0.95	0.92

父母への信頼性の高さによる親密性への影響 母親、父親それぞれへの信頼性の高さの違いによって、親密性のそれぞれの因子で差が出るかどうかを検討する。まず、父母それぞれへの信頼性を、平均値よりも高いか低いかで 2 群に分けた。そして信頼性高高群（母親への信頼性も父親への信頼性も高い）、高低群（父親への信頼性は高いが、母親への信頼性は低い）、低低群（母親への信頼性も父親への信頼性も低い）、低高群（父親への信頼性は低いが、母親への信頼性は高い）の 4 群に分けた。そして、これらの 4 群それぞれにおいて、親密性の差を調べる。

母親へのつながりの親密性尺度の差 母親、父親への信頼性ごとの、母親へのつながりの親密性尺度の記述統計を以下の表 17 に示す。平均の差が有意であるかどうかを調べるために、分散分析を行ったところ、結果は有意であった（ $F_{3,104} = 37.70, MSE = 0.28, p = .000, \eta^2 = .521$ ）。そこで、Holms 法による多重比較を行ったところ高高群と高低群（ $p = .022, d = 0.87$ ）、高高群と低低群（ $p = .000, d = 2.24$ ）、高低群と低低群（ $p = .000, d = 1.37$ ）、低低群と低高群（ $p = .000, d = -1.69$ ）においてその差が有意であった。高高群と高低群では、高高群の平均値が高かった。高高群と低低群では、高高群の平均値が高かった。高低群と低低群では、高低群が高かった。低低群と低高群では、低高群が高かった。

表 17 父母信頼性ごとの母親へのつながりの親密性尺度記述統計

	度数	平均値	標準偏差
高－高	51	4.07	0.45
高－低	12	3.61	0.48
低－低	38	2.88	0.64
低－高	7	3.78	0.43

母親への依存的親密性尺度の差 母親，父親への信頼性ごとの，母親への依存的親密性尺度の記述統計を以下の表 18 に示す。平均の差が有意であるか調べるために，分散分析を行ったところ，結果は有意であった ($F_{3,104} = 5.88$, $MSE = 0.98$, $p = .001$, $\eta^2 = .145$)。Holms 法による多重比較を行ったところ，高高群と低低群 ($p = .020$, $d = 0.62$)，低低群と低高群 ($p = .004$, $d = -1.43$) がそれぞれ有意であった。高高群と低低群では，高高群の平均値が高く，低低群と低高群では，低高群の平均値が高かった。

表 18 父母信頼性ごとの母親への依存的親密性尺度記述統計

	度数	平均値	標準偏差
高－高	51	2.85	1.16
高－低	12	3.02	0.74
低－低	38	2.23	0.84
低－高	7	3.66	0.69

父親へのつながりの親密性尺度の平均の差 母親，父親への信頼性ごとの，父親へのつながりの親密性尺度の記述統計を以下の表 19 に示す。平均の差が有意であるかを調べるために，分散分析を行ったところ，結果は有意であった ($F_{3,104} = 22.46$, $MSE = 0.48$, $p = .000$, $\eta^2 = .393$)。そこで，Holms 法による多重比較を行ったところ，高高群と低低群 ($p = .000$, $d = 1.67$)，高高群と低高群 ($p = .001$, $d = 1.48$)，高低群と低低群 ($p = .001$, $d = 1.23$) の差がそれぞれ有意であった。高高群と低低群では，高高群の平均値が高かった。高高群と低高群では，高高群が高かった。高低群と低低群では，高低群が高かった。

表 19 父母信頼性ごとの父親へのつながりの親密性尺度記述

	度数	平均値	標準偏差
高－高	51	3.85	0.58
高－低	12	3.54	0.58
低－低	38	2.67	0.86
低－高	7	2.80	0.56

父親への依存的親密性尺度の平均の差 父親，母親への信頼性ごとの，父親への依存的親密性尺度の記述統計を以下の表 20 に示す。平均の差が有意であるかを調べるために，分散分析を行ったところ結果は有意であった ($F_{3, 104} = 6.71, MSE = 0.87, p = .000, \eta^2 = .162$)。そこで，Holms 法で多重比較を行ったところ，高高群と低低群 ($p = .000, d = 0.92$) は有意であった。高高群と低低群では，高高群が高かった。

表 20 父母信頼性ごとの父親への依存的親密性記述統計

	度数	平均値	標準偏差
高－高	51	2.91	1.03
高－低	12	2.80	0.91
低－低	38	2.04	0.82
低－高	7	2.37	0.84

ノンバーバルスキル尺度と母親及び父親への親密性や信頼性の関係

ノンバーバルスキルがある人には母親及び父親への親密性，信頼性が影響しているのかを検討する。さらに，影響しているとすると，どのような親密性及び信頼性が関係しているのかも検討する。

ノンバーバルスキル尺度と母親，父親への親密性及び信頼性の関係 (男性) 表 21 に各尺度の男性の度数，平均値，標準偏差を示す。続いて，ノンバーバルスキル感受性，制御得点の男性のみを目的変数，「母親への信頼感尺度」，「父親への信頼感尺度」，「母親つながりの親密性尺度」，「母親依存的親密性尺度」，「父親つながりの親密性尺度」，「父親依存的親密性尺度」を説明変数として重回帰分析を行った。結果として，ノンバーバルスキル感受性を目的変数としたものは有意ではなかったものの，ノンバーバルスキル制御を目的変数としたものは有意であった。結果を以下の表 22 に示す。決定係数は 5%水準で有意であった ($R^2 = .302, F_{7, 44} = 2.72, p = .020$)。標準偏回帰係数が有意であった変数は，「母親への信頼感尺度」が 5%水準で有意であった。

ノンバーバルスキル尺度と母親，父親への親密性及び信頼性の関係 (女性) 表 24 に各尺度の女性の度数，平均値，標準偏差を示す。続いて，ノンバーバルスキル感受性，制御得点の女性のみを目的変数，「母親への信頼感尺度」，「父親への信頼感尺度」，「母親つながりの親密性尺度」，「母親依存的親密性尺度」，「父親つながりの親密性尺度」，「父親依存的親密性尺度」を説明変数として重回帰分析を行った。結果として，ノンバーバルスキル感受性を目的変数としたものは有意ではなかったものの，ノンバーバルスキル制御を目的変数としたものは有意であった。結果を以下の表 23 に示す。決定係数は 5%水準で有意であった ($R^2 = .334, F_{7, 47} = 3.36, p = .005$)。標準偏回帰係数が有意であった変数は，「父親への信頼感尺度」が 5%水準で有意であった。

表 21 男性のみ各尺度記述統計

	母親信頼感 尺度	父親信頼感 尺度	母つながり 的親密性尺 度	母依存的親 密性尺度	父つながり 的親密性尺 度	父依存的親 密性尺度
度数	52	52	52	52	52	52
平均値	3.98	3.9	3.5	2.22	3.35	2.44
標準偏差	0.87	0.95	0.8	1.01	0.92	1.12

表 22 男性のノンバーバルスキル制御得点を目的変数とした分析結果

	ノンバーバルスキル尺度 男性
母親信頼感	-1.070 **
父親信頼感平均	.522
母つながりの親密性	.165
母依存的親密性	-.027
父つながりの親密性	.319
父依存的親密性	-.122
決定係数	.302

表 23 女性のみ各尺度記述統計

	母親信頼感 尺度	父親信頼感 尺度	母つながり 的親密性尺 度	母依存的親 密性尺度	父つながり 的親密性尺 度	父依存的親 密性尺度
度数	55	55	55	55	55	55
平均値	4.28	4.02	3.65	3.17	3.31	2.65
標準偏差	0.82	0.92	0.70	0.89	0.86	0.89

表 24 女性のノンバーバルスキル尺度Ⅱ得点を目的変数とした分析結果

	ノンバーバルスキル尺度 女性
母親信頼感	-.66 +
父親信頼感平均	.64 *
母つながりの親密性	-.06
母依存的親密性	.00
父つながりの親密性	.12
父依存的親密性	-.20
決定係数	.33

ノンバーバルスキルⅡ尺度と母親，父親への親密性及び信頼性の関係（性別なし） 男女ともに有意であった，ノンバーバルスキルⅡ尺度における親密性及び信頼性の影響にう

いて性別を考慮することなく検討する。表 25 に各尺度の度数、平均値、標準偏差を示す。「父親への信頼感尺度」、「母親つながりの親密性尺度」、「母親依存的親密性尺度」、「父親つながりの親密性尺度」、「父親依存的親密性尺度」を説明変数として重回帰分析を行った。結果を以下の表 26 に示す。決定係数は5%水準で有意であった ($R^2 = .272$, $F_{7,100} = 5.34$, $p = .000$)。標準偏回帰係数が有意であった変数は、「母親への信頼感尺度」、「父親への信頼感尺度」が5%水準で有意であった。

表 25 各尺度記述統計

	母親信頼感 尺度	父親信頼感 尺度	母つながり 的親密性尺 度	母依存的親 密性尺度	父つながり 的親密性尺 度	父依存的親 密性尺度
度数	108	108	108	108	108	108
平均値	4.14	3.97	3.58	2.70	3.33	2.56
標準偏差	0.85	0.93	0.75	1.06	0.88	1.01

表 26 ノンバーバルスキル制御得点を目的変数とした分析結果

	ノンバーバルスキル尺度
母親信頼感	-.83 **
父親信頼感平均	.56 *
母つながりの親密性	.06
母依存的親密性	.14
父つながりの親密性	.17
父依存的親密性	-.22 +
決定係数	.27

考 察

ノンバーバルスキルと母親及び父親への親密性や信頼性の関係について

ノンバーバルスキルと母親及び父親への親密性や信頼性に何らかの関係性が見られたことは、先行研究で愛着がノンバーバル感受性や制御に影響を及ぼしていることが示されたのと同様である。

男性のノンバーバルスキルのうち、制御が母親への信頼感と負の関連を持っていた（決定係数の値が小さいものの、母集団を部分的に説明しているといえると考えられたため、今回の研究では採用するとした）。これは、「母親が好き」、「母親を信頼している」、「母親になんでも話せる」といった、自分が母親をとっても信頼している感情から、自分がどんな感情を表しても母親が受け止めてくれるという気持ちにつながったことが考えられる。家族の中でも特に関わりが多いと考えられる母親が自分の感情をなんでも受け止めてくれる、と思う気持ちが強くなり、ノンバーバルの制御と負の関連を持つのではないかと考える。

一方女性のノンバーバルスキルでは，制御が父親への信頼感と正の関連を持っていた（決定係数の値が小さいものの，母集団を部分的に説明しているといえると考えられたため，今回の研究では採用するとした）。これは，父親という，家族の中でも権威を持つ存在が関連していると考えられる。そのような存在である父親とお互いに信頼しあうところから，家族としての関係というよりもむしろ，一人一人の人間関係という意識が強くなり，きちんと自分の感情をコントロールしながら，父親と接するという意識が現れていると考ええる。

また，性別を区別せずにノンバーバルスキル制御と親密性や信頼性の関連を調べてみた際には，母親への信頼感とは負の関連性，父親への信頼感とは正の関連性を持っていた。これらの結果は，男性での結果，女性での結果と同じような理由であると考えられる。さらに結論を深めるためには，男性と女性がそれぞれ母親，父親という存在をどのように捉えているのか，また，家族の中の男女比などを踏まえてさらに検証していく必要があるだろう。

性別との関連について

母親及び父親との親密性や信頼性の性差を検討したところ，母親への依存的親密性に有意な性差が見られ，女性の方が，より母親への依存的な親密性を抱えていることが明らかになった。これは，先行研究で指摘されているような「一卵性母娘」や女性特有の同性に対する意識が関連していると考えられる。一卵性母娘では，母親と娘の共依存的な関係が指摘されていた。また，女性特有の意識として，「同性の意見が気になる」，「同性の価値観に自分も合わせたい」という考えが強い傾向にあると考える。同性の中でも，自分にとって一番身近な同性である母親に対して，このような意識が強まり，女性の方が依存的な親密性を母親に感じる割合が高くなったのではないだろうか。

母親及び父親への信頼性の高さや親密性の関係について

この分析では，母親及び父親への信頼性の高さによって4つの群に分類し，母や父への親密性の高さに差があるかどうかを検討した。結果として，すべての親密性の因子において，母親にも父親にも平均より高い信頼性を持っている群が最も親密性の平均値が高かった。また，母親へのつながりの親密性においても，父親へのつながりの親密性においても，父母どちらかにおいて信頼性が高い人はどちらに対して信頼性が低い人よりも，親密性を感じる傾向にあるようだ。これらの結果から，どちらかに信頼性を持っていれば，母親や父親に思いやりを持ったり，助け合ったりするという親密性を築くことができると考えられる。しかし，「評価が気になる」，「父親や母親に相談しないと決められない」といった依存的な親密性は，信頼性を築いていないと育ちにくいようである。

今後の展望と課題

今回の研究から，部分的にはあるが，母親や父親への信頼性がノンバーバルスキル，特にノンバーバルスキルの制御に影響していることが明らかとなった。両親への信頼性の

育て方が明らかになれば、感情の制御があまりできない人に対しての支援策も考えられるだろう。

今後の課題としては、以下の二つがあげられる。一つは、調査対象の人数を増やすことである。今回は、人数が少なく、4群に分けたときに、極端に人数が少ない群が出てしまった。少ない群があると、母集団に当てはめにくいと考える。もう少しサンプル数を多くして調査を行う必要がある。もう一つは母親への親密性を測る尺度を父親に対してもそのまま使用してしまったことである。問題でも記述したように、父親と母親の子どもへの関わり方には性差があると指摘されている。このことを踏まえて考えると、家庭内での父親と母親の子どもにとっての役割は異なっていると考えられる。そのため、意見をくれるかどうかでも「つながりの」な親密性なのか、「依存的」な親密性なのかは父親と母親で違ってくると思われる。そのため、予備調査として今日の大学生が「父親」や「母親」をどのように捉えているのかを調査したうえで、父母それぞれに使用する尺度を決定する必要があると考える。

文 献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎・大場 葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動. 岩崎学術出版)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and Anger*. London: Hogarth Press. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II 分離不安. 岩崎学術出版)
- 花沢成一・松浦 純 (1986). 男女青年における対児感情と乳幼児接触経験との関係 日本教育心理学会 28 回総会発表論文集, 356-357.
- 金政祐司 (2005). 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—一貫性についての検討— パーソナリティ研究, 14, 1-16.
- Lamb, M. E., Pleck, J. B., Charnov, E. L., & Levine, L. A. (1987) *A biosocial perspective on paternal behavior and involvement*. In Lancaster, J. B. (Ed.) *Parenting across the life span: Biosocial dimensions*. Aldine Publishing. pp.111-142.
- 野間あずさ・牛尾 恵・横瀬洋輔・境泉 洋 (2013). 女子大学生における母娘関係が娘の自尊感情と抑うつに与える影響 徳島大学人間科学研究, 21, 35-47
- 前田真理 (2008). 親子関係とは—愛着と養育態度— 川島一夫 (編) 図で読む心理学 発達 改訂版 (pp.85-94)
- 水本深喜 (2017). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響—「母親への親密性尺度」による検討— 青年心理学研究, 27, 103-116.

- 和田 実 (1991). 対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- 米澤好史 (2015). 「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム—発達障害・愛着障害現場で正しく子どもを理解し，子どもに合った支援をする 福村出版